蔡元培と宗教（その四）

――第三章『群学説』――　厳復訳『天演論』との出会い（二）

後藤延子

第五節　厳復訳赫胥黎『天演論』読後

これは、未発表の手稿のまま残された。蔡元培の読書ノートである。彼が、『天演論』の入手後、何度も読み返し、通藝学堂の厳復の講演を聴きに出かけ、自分なりの疑問をひとまず解消した後に、まとめ上げたものである。そしてこうした準備作業を踏まえて、蔡元培の社会学原論・倫理学原論とも称すべき『群学説』が世に送り出されたのである。

従ってこれは、蔡元培がいかに『天演論』を理解したかを示す文章と言える。『天演論』の訳出作業が始まって以来[1]、中国の多くの知識人に読みつがれてきたとはいうものの、直観的、断片的な感想の域を脱して、きちんとその内容を文章に整理した、読書ノートは殆ど見当らない[2]。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、中国の前途に関心を抱く知識人たちが、一度は眼を通した、思想的影響の大きさが指摘されながら、いかに読まれたかの実態についての報告が乏しいのはなぜか。

その最大の理由として、大方の一致して指摘するのは、厳復の文章が古雅な名文のため、「艱深」だということである。勿論、厳復も弁解するように、彼の翻訳の対象に選んだ原典が、いずれも「学理邃賾の書」であり、容易には理解できない高度な内容の労作であったことも、否定できない事実である。

それゆえ、深い学識と高い教養に裏づけられた、文学的な香りの豊かなハクスリーの原典を翻訳するには、相当な理解力が要請されよう。それが更に彫琢を施した中国の古文で表現されているとしたら、『天演論』を読み解くことは、並々ならぬ根気が必要となる。まして単なる読みっ放しではなく、自己の理論形成の里程標として、簡潔な文章に錬り上げることが、いかに精力を要するかも、たやすく想像のつくことと言えよう。

ところでこの私的な読書ノートは、『天演論』がほぼ五万四千字程の分量であるのに対して、わずか四百字余りの短いものである。とはいえ内容は圧縮された、密度の濃いものであり、三つの段落に分けることができる。

まず第一段は、『天演論』の著者ハクスリーの主張の要約である。第一段について注目すべき点は二つある、一つは、「自営」（self assertion）の評価、位置づけである。蔡元培は次のように言う。生存競争に始まり自然選択（淘汰）で決着する世界で、人間が「天行」（宇宙過程）と争って勝利したのは、「保群の術」（人間社会を形成し維持する方法）を編み出したおかげである。人間を外界の諸物との生存競争に勝利させた原因は「自営」にあるとはいえ、この「自営」は人間社会に於ては「凶徳」であり、社会の団結を阻害する。従って「群術」の進歩とともに、「自営」は必ず減少し、それ

に伴って生存競争の力も低下する。しかし「群術」の進歩は人口の増加をもたらす。人為淘汰を人間には施せない以上、人口の過剰に乗じて、今度は人間同士の間の生存競争が激化する。よって「天行」と「人治」（倫理過程、即ち人間社会を組織し協力体制を形成・維持・発展させる人間の倫理的努力のプロセス）とは、「終古、相い消長する」ことになる。

以上の蔡元培のまとめは、一見、ハクスリーの論旨を良く把握しているように見える。だが人間社会の「凶徳」である「自営」は、地球の生物進化の長い歴史の途上に、「禽獣」から進化して誕生した人類に、「生ありて自りこのかた」、宿命的に刻印された「罪悪」である。それゆえ「自営」は消滅させることはできない。そして外界の諸物との生存競争に勝利するため、個々人の「自営」を抑制して実現したのが、「人治」であり「群術」であり、即ち人間社会集団の「自営」の組織化に他ならない。それゆえ「天行」と「人治」は相反しつつも、実は「同に一つの原に出る」ものであることを、蔡元培がどれほど理解しているのか、一抹の懸念をもつものである。両者の終りなき闘いは認めているものの、両者の一元論的把握がどこまでできているのかに些か不安を感ずるのである。

そしてその答えは、同じ第一段のもう一つの注目すべき点の中で与えられている。そこでは次の如くに言う。論理学・数学・化学・物理学（ハクスリーの原文は論理学・数学の代りに天文学があげられている）が、近年精密の度を増しているが、生理学・心理学・倫理学・政治学はまだ概略を窺う域にとどまっている。だがその進歩の道程は阻止できない以上、「天に勝ちて治を為すの説、終に以て易うるなし」である。

ハクスリーは確かに一方では、宇宙が下降状態に入り、「人道が至善に止まるは、必ずしも尽くは然らざるものあり」との退化への危惧の念を表明していた。しかし他方、科学の発展により知力が向上して協同の力が結集すれば、「人治」による「天行」の支配が実現できる日が到来することを、祈りにも似た期待をこめて望み、そのために不屈の闘志を以て粘り強く努力するよう呼びかけてもいた。そして、理想の社会状況がいつか必ず実現するなどの確約には慎重な態度を取りながらも、数世紀を経る中で人間の生存条件の改善が漸進的に進んで行くであろうとの見通しを、渇望の念をまじえつつ述べて、『進化と倫理』を結んでいる。

これが多年、生物学の研究に従事してきたハクスリーの踏み越えてはならない、ぎりぎりの限界であったと言える。十九世紀の末、帝国主義段階にあった、欧米社会で激化する諸矛盾を眼のあたりにする中で、科学者として本来、越えてはならぬ一線を踏み出して倫理について語った、一人の老ヒューマニストの遺言の、これが当然守られねばならない節度であった。ハクスリーは予言者となることは禁欲しなければならなかったのである。

しかし蔡元培、いや『進化と倫理』の訳者厳復の場合も、ハクスリーが跳び越せなかった境界線は意識する必要がない。なぜなら彼らは博物学者ではなく、科学者として堅持すべき掟には無関係だからである。当時の世界の動向の中で、中国の行くべき方向を見定める指針を、『進化と倫理』に求めたにすぎなかったわけである。そして厳復のこの箇処の、「数千年ならずして、郅治に臻ると雖も可なり」の訳にミスリードされて、蔡元培も同じく、「天行」に対する「人治」の勝利を必然の方向と確信している。そしてより正確に言えば、ミスリードされたと言うよりは、厳復も、また公羊家三世進化説を信奉する蔡元培も、理想社会を憧憬し、その実現を熱い心

で希求する、中国近代知識人共有の知的雰囲気の裡にあったと見るべきなのかもしれない。

ともあれ第一段によるかぎり、「天行」と「人治」との一元論的理解がやや曖昧で、「天行」の人間内部に貫徹した「自営」のしぶとさへの直視において不十分であり、「人治」の「天行」に対する勝利（「勝天為治」）に楽観的であると評することができよう。そこには、自然観察の中から得られた生存競争の苛酷さの実感も、また馬の先祖返り（「導言」十六の案語参照）といった進化のプロセスが見せる不可解な現象の体験も持たない人間の、素朴な直線的進化への手放しの楽観主義を窺い見ることができる。

さて次に第二の段落に移ろう。ここでは、厳復がスペンサーに依拠して行なった、ハクスリーへの反論をまとめている。蔡元培は先ず「導言」十五「最旨」の中で、厳復が案語中に引用した、スペンサーの説の要旨を書きとめている。即ち、ハクスリーが人間が社会をつくって自然界の諸物との生存競争に勝利しても、その結果、人口の増殖が再び人間同士の生存競争を激化させる危険性が生じることを指摘して、その将来の解決策を考えあぐねているのに対し、スペンサーの説によりその隘路を打開した長文の案語の要約である。

蔡元培はこれを、「群治、進むこと極まれば、脳を用いること奢（おご）くして孳乳稀（しゅっせいすくな）く、過庶（かしょ）は患（うれ）いとなすに足らず、郅治、必ず期す可きなり」とまとめた。その上で、「蓋し生理学を以てこれを推すに、天演の説は、進むありて退くなし。スペンサーの説は、ハクスリーの説よりも密なり」と、厳復の案語の立場に同調している。

ところでハクスリーは、生物学者として業績をあげてきた学者であると同時に、民衆に対する公教育の実施、科学知識の普及・啓蒙などに尽力した社会活動家でもあった。それに対しスペンサーは、今迄の諸科学の成果を採り入れつつ、世界の全体を解き明かす、一貫した哲学体系、即ち総合哲学体系の構築に生涯を捧げた哲学者である。一方は、自己の自然観察・探究の結果にもとづいて、科学者としての良心に忠実でありたいと厳しく自己を律しており、他方は推論を重ねつつ、自己の体系の完成に向って進んで行く。それゆえ両者の立論は、そもそもの立脚点が異なるわけである。

にもかかわらず、この両者の相違に重大な関心を払わず、両者を同一レベルで比較して、スペンサーに軍配を揚げたのが厳復であり、それに蔡元培は追随したわけである。そしてこうしたやり方を、殆ど疑いをもたずに受け入れる段階に、当時の中国の知識人を囲繞する知的状況があったことがわかる。勿論、厳密な実証科学の境界線を堅持すべきでありながら、つい一歩足を踏み出し、実証された結果以外の推論に走り、一般化の誘惑に陥りがちな一面をもった、ダーウィンやハクスリーにも、その責任の一半は帰せられよう。

ところで当時の中国の知識人の知的状況として二つの点が指摘できる。一つは、西洋近代の諸科学の成果・学説を、「公理」、「公例」として、絶対・自明の真理として受けとめる、一種の科学信仰的な傾向である。それらの「公理」、「公例」が、科学の前進の途上に設けられた仮説に他ならず、あくまでも暫定的性格のものであるとは考えられていない。今後の科学の更なる発達の中で、部分的に修正が加えられて行ったり、また重大な反証があげられて全面的に覆えされる可能性もあることは、まだ視野に入っていないのである。勿論これは科学輸入期特有の現象であり、科学が定着し、各々の専門分野の研究に従事する者が増えれば、そうした知的状況は大きく改変されることではある。

さてもう一つは、生存競争の用捨ない残酷な闘いの永続、また停

滞や退化の可能性をも予想させる進化のプロセスの、複雑・錯綜・多様な局面の展開、これらに耐えることができない心的傾向を指摘できる。物事を簡単化してとらえ、またともすれば「性善説」的伝統に引きずられ、そして理想社会の到来の必然性を説く論調を歓迎するということに、それを窺い知ることができよう。

そして以上の知的状況下にあった蔡元培は、厳復に誘導されて、スペンサーの主張に賛同した。人口の過剰による生存競争の激化は起らず、理想の政治状態の実現が可能であると確信できたのである。先にも述べたように、蔡元培は春秋公羊家三世説を信奉していた。従ってスペンサーの「郅治、必ず期す可きなり」の発言は、極めて自然に受けとめられるとともに、自己の信念を西洋の高名な哲学者の権威により補強され再確認されることになったにちがいない。

さてすっかりスペンサーに傾倒した蔡元培は、厳復のあげるスペンサーの「公道界説」、即ち、「各々自由を得て、他人の自由を以て界となす」を書きとめる。これは「導言」十四の厳復の案語では「太平公例」と呼ばれており、スペンサーの『倫理学原理』の『群誼』の一篇は、この「公例」を解釈するために書かれたと述べる。ところでこの厳復が引く「太平公例」には、重大な欠落がある。それは、「いかなる他人の同等の自由を侵害しないかぎりにおいて、すべての人は自己の欲するところをなす自由がある」の、原文の「同等の」が抜け落ちていることである。そしてこの一語の脱落は、厳復の自由についての以後の思索に大きな影を落すことになった。と同時に、『天演論』が当時の中国の知識人によく読まれた本であるだけに、蔡元培をはじめ、多くの人々への思想的影響も無視することはできない。

さて次に蔡元培が書きとめたのは、厳復のあげる、スペンサーの「保種の三大例」である。（未完）

附記

紙幅の都合により、第五節の半ばで中断せざるを得なかった。次号にまわすことをお断りしたい。

注

(1) 厳復の訳した『天演論』（原本はT・H・ハクスリー著『進化と倫理』一八九四年刊）には、大別して三種類の系統のテキストがある。以下、それらについて詳述する。

1、第一種類のテキスト群について

先ず第一群のテキストは、いくつかの原稿本である。その中の、多分最も早い時期の訳稿が、木版本で刊行されたのが、一八九五年（乙未年三月）陝西味経售書処重刊の『天演論』として現存している。陝西味経售書処とは、陝西省涇陽県の味経書院山長劉光蕡（号は古愚）が、「造士」のために、書院独自の施設として設けたものである（劉の『陝甘味経書院志』「刊書」第六　光緒二十年　陝西味経售書処刊参照）。梁啓超は康有為への書簡の中で（『翼教叢編』坿一巻。一八九六年の書簡と見られる）、劉が京師と上海の強学会の二つの序を「自ら刻し」て、陝西省で宣伝し高く評価してくれたことを報告している。また資金を募って「織布局」設置に動いているなど、「魄力」のある人と見受けられるので、手紙でもって働きかけると同時に、『新学偽経考』を送り、その反応を見たいなどと、自分の考えを提案している。

東南部の沿海都市ならともかく、西洋の新しい学問の情報が入りにくい、内陸の中央部に、積極的な改革の志と実行力をもった人がいることは、梁啓超ならずとも感動せざるをえないことであったろう。そ

して厳復の身辺近くにいた人が、訳稿を借り出して読み、写し取って劉光蕡に送り、それが刊行されたものと思われる。多分、新しい思想の恩恵を早く多くの人々に頒ちたいとの熱意に出るものであり、厳復もそれを特に咎めたりした事実もない。ともあれ訳稿としては、まだ手を入れる必要があったものだろう。そして通行本が出廻る中で、その使命を終え、姿を消してしまうことになったにちがいない。

このテキストについては、一九五七年に『厳復伝』（上海人民出版社）を刊行した王栻の調査報告がある。長年にわたり厳復に関する資料の蒐集に当ってきた王栻の成果が、『厳復集』全五冊（一九八六年中華書局）である。王栻によると、陝西図書館に保有する現物は、訳文も通行本とは相当に違い、序文も「訳例言」なども付されていないとのことである。ただ湯志釣によれば、この本の「按語」に、「今光緒二十二年丙申を去る、共二千八百六十四年」とあるとのこと（『戊戌変法人物伝稿』増訂版上冊　巻三厳復の注12）である。原稿本の「論」三に釈迦の生年として同じ文があるが、或いは版を重ねる中で「按語」に変えるなどのことがあったのかもしれないが、よくわからない。尚、通行本の「論」三では案語中に一年プラスして入っている。

さて、一八九六年三月、梁啓超は上海に行き、「時務報」刊行の準備に携わることになった。そして厳復は、かつて英国留学出発の際に随員であった馬建忠の紹介で、梁啓超と書信のやりとりをするようになった。「時務報」が創刊されて後、天津を訪れた黄遵憲から「時務報」が人々に大歓迎されている知らせを聞き、早速、手紙とともに銀百元のカンパを送った（穣卿進士・卓如孝廉あての書簡　一八九六年九月二四日。カンパは同年十月七日刊行の「時務報」第七冊で紹介されている）。

そして梁啓超から寄せられた十月八日付の書簡で、二十三歳の若き梁啓超が、馬建忠についてラテン語を学んでいることを知り、大いに喜び、『天演論』の原稿と、過去に発表した自分の文章の中から数篇を選んで送っている（厳復の返事の発信日は記されていない。その内、『辟韓』が「時務報」第二三冊　一八九七年四月十二日刊行に掲載され、その内容の過激さが、「時務報」の有力なパトロン湖広総督張之洞を激怒させている。尚、『原強修訂稿』は、梁啓超の「時務報」への原稿催促に応じて書いたが、結局、間に合わせることができなかったらしい）。さてこの時、梁啓超の許に届いた原稿が、『治功天演論』の名で呼ばれるものと見られる。今、『手稿本』、通行本（この二つは後述する）ともに「自序」の作成の日付が、「丙申重九」（一八九六年十月十六日）となっている。これは絶対にありえないことである。ただこの頃、梁啓超に原稿を送るに当り、「自序」の原形に当る序文が、ひとまず形を成したことを物語るものだろう。そして梁啓超に送付した原稿の「自序」とは、呉汝綸に翌年早々に修正の依頼のために送ったものと大差ないだろう。

その理由は、この原稿を入手するや、梁啓超とその周辺の人物に広く読まれ、一種の共同研究が開始し、「時務報」第三六冊（一八九七年八月十八日刊）の「地球紀年」など、が正しくその一端を示していると見受けられるからである。この米国の「格致報」からの訳文は、「英国の最も著名な格致家・開爾非因卿」の最新の学説の紹介である。そしてこの人こそ、呉汝綸の『節本天演論』の厳復の「自序」の中に登場する、「唐生維廉」に他ならないからである（通行本では人名は削除され、その「熱力平均すれば、天地毀る」の学説のみ残されている）。梁啓超は一八九七年四月に厳復に手紙を書き、三月に二十一頁に及ぶ懇切な書簡を受け取ったことに謝意を表しつつ、厳復の附会を戒める忠告や、『天演論』の内容について、自分の意見を述べている。また『天演論』と譚嗣同の『仁学』の両説を参照しつつ、師の康有為の説を推演して『説群』の一文を草していることを報じている。『説群序』

は「時務報」第二六冊（同年五月十二日）に載せ、また「知新報」十八冊（五月十七日）には、『説群序』『群理一』を併載している。「時務報」創刊以来、殆ど跡切れることなく連載していた『変法通議』の中では、『論学会』（第十冊　一八九六年十一月五日）の頃から、明らかに厳復の原稿を読んだしるしが現われてきている。

ところで第一種に属するテキストは、もう一つある。それは、厳復の第五子厳玷の遺品の中から発見された『手稿本』である。これには先に述べた、「赫胥黎治功天演論序」がつけられている。これは通行本の同じ日付の「自序」に比べて、わずかに長く、字句にも多少の異同があるが、内容に大きな差があるわけではない。ただ通行本の場合、『手稿本』にあった、エネルギー保存則やティンダルの評価や、ウィリアム・トムソン（ケルヴィン卿）とピーター・ガスリー・テイトの共同研究による、天地の終局の必然性の学説などが姿を消し、衒学的で雑駁な部分が整理されて、流れがよくなっている。『国聞報滙編』第二冊（一八九七年十二月八日）掲載のものが、どちらであるかはわからない。

『手稿本』の「訳例」は、四か条の簡単なもので、通行本の「信・達・雅」の翻訳の基本原則の確立には、まだ時機が熟していなかったようである。またこの「訳例」は、通行本の『訳例言』に殆ど吸収されたと言えるが、ただその第二条のみは姿を消した。それは、原書中の西洋の古書からの引例を、「中国の古書・故事を以てこれに代える」の条である。厳復としては、例として著者の意図にかなうものであれば、読者に意味がよく伝わる方を選びたかったのであろう。だがこの点は厳復が訳文の斧正を乞うた、呉汝綸の同意が得られなかった。

呉汝綸はかねてより厳復の訳書計画（穆勒（ミル）の書も含む）を聞き、スペンサーやハクスリーの主張についても知らされており、『天演論』の脱稿を待ち望んでいた（呉汝綸の厳復への書簡　一八九六年八月二六日）。そして呂臨城（秋樵）が送り届けてきた訳稿に眼を通し、重大な疑念を表明した（一八九七年三月九日の書簡）。それは、厳復個人の著述であれば、自由奔放に議論を展開すればよいが、「もし赫氏の書を訳するを以て名とすれば、篇中に引く所の古書古事（ママ）は、みな宜しく原書の称する所の西方なる者を以て当となすべし。中国人の語に改め用いるを必せざるべし」ということであった。確かにハクスリーは中国に通じていない以上、その著書の中で中国の故事を語るのは、奇異な感じを与えるだろう。

ただ呉汝綸の発言の本意は、それを通じてもっと本質的な問題を語りたかったようである。呉汝綸は、晋・宋の名流たちが仏典を訳した時のやり方に倣い、中国の学者の著述とは明確に「体制」を区別するべきだと提言する。異質の文化的背景をもつ立論を、中国風にアレンジすることは、読者の理解を助ける方便だとはいえ、対象に対する距離感、緊張感を薄めることになろう。そして曽国藩、李鴻章の幕下に長く勤めていた呉汝綸は、厳復の英国留学中から洋務を「辦理」できる人物として、高い評価を受けていた人物である（『郭崇焘日記』一八七八年十一月二二日）。呉汝綸は厳復からアダム・スミスの『国富論』の訳稿の校閲を頼まれた際も、洋書の訳出には、「宜しく別に体制を創るべし」と提案している。その「体制」は、今迄の中国文や仏教漢文の模倣ではない、全く新しい独自の「体制」であり、厳復にその創製者になるよう期待している（一八九九年四月三日）。

これは、常に広く新出の訳書に眼を配って良書選択の眼識を養い（『答賀松坡』一八九六年九月十日）、西洋諸国語を身につけ、直接に専門の原書を読める人材の育成の方法に心を砕き（『答馬通白』一八九九年五月一日）、従来の訳書の欠陥を知り抜いていなければ言える言葉ではなかった（『与陸伯奎学使』一九〇〇年十一月八日では、「現天津訳局、上海より訳書七百余種を運び到ると雖も、但し中国の訳手、

往々にして謬りて己が意を附す。西人の見る者、輒ち詫(あやし)みて真を失するとなし、敢えて拠りて定本となさず」と指摘している）。

さて厳復は、当代随一の古文の名家と唱われていた呉汝綸の助言に従って、『天演論』の原稿の中から、中国の古書・故事を削除する作業に着手することになった。だがその作業は、結局、不徹底に終り、通行本の訳文の中にも時として、中国の古書・故事が顔を覗かせ、驚かされることも多い。なぜ中途半端な結果になったのかについては、執着性格で凝り性のあまり、原稿が真っ黒になるまで修正され、当人にも脈絡がつかめなくなったなどの技術上の事情もあったようである。だが『手稿本』、通行本の両者の序文に、中国古典の頻出すること、敢えて佶屈聱牙な文体に固執したことなども併せて、総合的に考察する必要がある。

呉汝綸の親切な忠告に従いながらも、厳復はまた原書中の例では中国人にわかりにくいので、原文ではこうだが、中国人周知の例に改めたなど、わざわざ断わる場合もあった（「導言」十「択難」、「導言」十三「制私」など）。当時の中国の外国事情に対する閉鎖的状況からすると、原書中の引例をそのまま用いれば、読者をかえって遠ざけることにもなりかねず、呉汝綸の指摘は全く正論ではあるものの、厳復はディレンマに頭脳を痛め続けることになった。

『天演論』の原稿本に、「厳復学」（学とは春秋公羊伝解詁何休学のように、注釈闡述の意味）と記したものがあったり、通行本の「訳例言」では、「題して達恉と曰い、筆訳と云わず」と断わり、「厳復述」と称したりしているものもある。これらはみな、厳復の解決の方途を求めての試行錯誤の跡を示すものと見てよい。訳文の後ろに「案語」を付するのも、読者の理解を助ける工夫の一例と言える（ジェヴォンズの『論理学入門』を『名学浅説』と題して一九〇九年に刊行した際の「訳者自序」では、文中の引例は自分の考えで変えたと述べ、読者に理解させるところに眼目があり、原文に合致するか否かは問題にしないと、すっかり開き直っている。平易な啓蒙的教科書の場合と、高度な学術的著作の場合とでは、翻訳のスタイル、手法に相違があって然るべきだとの自覚が、どの程度であったのか、というところに問題があろう。翻訳論の問題として、福沢諭吉の『学問のすすめ』や『文明論之概略』の場合と、対比して考察を加えると興味深い研究となろう）。

さて呉汝綸の「圏点」（『与五弟書』一八九七年八月二十三日）や批語（王栻によると黄緑色の字で記されているという）を参照しながら、丁酉（一八九七年）の夏まで、数段毎に文章の修正作業が行われた。その結果、『手稿本』が誕生した。『国聞報滙編』に一八九七年十二月から翌九八年二月まで、四回にわたり掲載された『天演論懸疏』（「懸疏」とは通行本の「導言」を指す）は、恐らくこの『手稿本』によるものと思われる。現在この『手稿本』は、王栻編『厳復集』の第五冊目に収録され、原稿本との校合の結果も報告されている。

ともあれ第一種類に属するいくつかの原稿は、通行本成立の過程に生み出された、過渡期的性格のものと言える。中国の知識人が、自分の独力で本格的な西洋近代の学術的達成を踏まえた著作を翻訳するという作業には、やはりこうした試行錯誤のプロセスが必ず要請されねばならなかったのであろう。

2、第二の種類のテキストについて

さて次に第二番目の種類のテキストに移ろう。このテキストは、いわゆる通行本に連らなる系統のものである。王栻によると、すべて三十種以上の版本があったとのことであり、ために多少の字句の異同は否定できない（蔡元培が読んだのは、通行本のテキストの中でも定本と言われる、厳復自身が出版に関与したものではない。ただ字句の異同は、論旨に関わる重大なものではなく、無視できる範囲内にある）。この一連のテキストは、呉汝綸の序文、厳復の「自序」と「訳例言」

とが付されており、刊本としての体裁が整っている。

ところで、初期の訳稿が陝西味経書院で出版されたり、また梁啓超に原稿を送ったりしたことから、人々の評判になり、出版を促す声も高くなった。厳復もいずれは二、三百元を支出して上梓することも考えており、そのために修訂した『手稿本』（「改本」と称している）を再度呉汝綸に送り、見てもらうなどの準備をしていた（『与呉汝綸書』一八九七年十一月九日）。こうして文章の推敲を重ねながらも、尚且つ出版には容易に踏み切らなかったのはなぜか。厳復は「訳例言」の中で、この書が「探賾叩寂の学にして、当務の亟やかにするところに非ず」、ために世に問うを願わなかったと述べる。

ただこれはどうやら口実で、出版の計画をもち、そのための準備をしつつも、実現をためらったのは、出版しても売れ行きが芳しくなく、経費の回収に不安を抱いていたからのようである。呉汝綸は『答呂秋樵』（一八九八年二月十日）の中で、厳復からの売り捌きの依頼に対して、次のように答えている。それは、「近日、報を閲する者すら尚お多かる能わず。又、閲する者も、未だ必ずしも中国の古学に深く通じず、ほぼ書史を猟したにすぎず。時務報を得てすでに拍案驚奇す。幾道の天演論の如きは、恐らく大声しても里耳に入らざらん。徳を知る者は希く、脛せずして走るを冀い難し」、よって「時務報」刊行の時に湖広総督張之洞が行なったと同じく、直隷総督王文韶に各部下に購読の命令を発するよう頼んだらどうか、との提案であった。従って呉汝綸自身も、売れ行きの見通しを懸念していたことがわかる。

こうして出版の目処がつかぬまま、訳文を弄くりまわしていたところ（『与呉汝綸書』一八九八年一月二十日「『天演論』索むる者は日々に多し。顧た其の文字は尚お商量を須つ」）、にわかに出版の話がもち上った。それは、訳稿を借りて行って「鈔」していた沔陽の盧靖（字は木斎）が、それを郷里の湖北省にいる弟に送り、盧靖の室名の慎始基斎で木版出版に取りかかったことである。厳復はその刻字の校閲を求められ、「不佞の本意に非ず」と恰好をつけながらも、刊本としての体裁を整えることに着手し、巻頭を飾る序文を呉汝綸に依頼した。

呉汝綸は早速、序文を送るとともに、追っかけて書簡も送った（一八九八年三月二十日）。そこでは、厳復が『天演論』について思いついた意見を、訳文の後ろの「案語」に入れているのは、「義例精審」とほめながら、不満な点を二つあげる。一つは、プロレゴメナに「卮言」とか「懸疏」とかの訳を当てるのは、「能く樹立して因循せざる者の為す所」としてふさわしくないと指摘する。新しい内容の学問のためには、古臭い言葉を使うべきではないとの、決然とした注文だと言える。もう一つは、分節化した各篇に、それぞれ名前を与えて、要旨を摑み易くすることを提案し、呉汝綸が「妄りに撰した」、各々の篇名案を参考用に付している。

これを受け取った厳復は、当時、天津で共に「国聞報」の編集に当っていた友人夏曽佑と最後の検討に入った。そして、呉汝綸から「濫語」と言われた「卮言」、仏教語を踏襲したと言われた「懸疏」をついに放棄して、本来のプロレゴメナの原語に忠実に「導言」とすることに決めた。各篇の分節化については、ハクスリーの原書の議論の一貫性を分断するとして、夏曽佑から問題が蒸し返されたが、読者の便宜を優先させることにし、また各篇に呉汝綸の提案に従って名前をつけることに決着した（「訳例言」）。但し各篇の命名案のうち、上巻は十八篇中一つだけ不採用となり、下巻は十七篇のうち六篇の名前が不採択になった（後述の『節本天演論』の各篇名が、呉汝綸の提案したものである）。

ところで、あくまで採択権は厳復にあり、呉汝綸の案が拒否されても別に問題はないが、一つだけ注意しておかねばならぬことがある。それは下巻の「論」十七の名前である。呉汝綸の命名案では、これは

「進治」（治に進む）であった。だが厳復はこれを斥けて、「進化」と命名した。意味は同じで、両者とも、最高の理想的政治状態に進んで行くということである。厳復は、ハクスリーの『進化と倫理』に『天演論』の書名をつけた。ということは、日本でエヴォリューションを「進化」と訳しているのに、敢えて異を唱えたことを意味する（日本で「進化」の語が頻出して一般的に用いられるのは、明治十六、七年頃からである。これが加藤弘之の明治十五年の『人権新説』の発表によるものであることは、もはや定説化している。加藤は明治十二年十一月、及び翌十三年三月の二つの講演の覚書の中で、すでに進化の語を使用している。尚、『哲学字彙』初・二・三版参照のこと）。

因みに言うと、厳復は日本人の考案した訳語に批判的で、原語の語源にまで遡るとともに、また由緒正しい漢語を用いて、敢えて独自の訳語の創出に努力している（『与外交報主人書』一九〇二年で、「今、泰西二千年孳乳演進の学術を、三十年勤苦して僅かに得たるの日本に求むれば、その盛んに訳著ありと雖も、その名義は、その未だ安からざるに決すべく、その考訂は、その未だ密ならざるをトすべし」とある）。しかし、厳復の「訳名の立つるに、旬月踟躕す」（「訳例言」）の苦心の末の訳語も、その殆どが、日本への留学生が持ち帰った、日本製の訳語によって淘汰されるという皮肉な運命を辿ることになった。このことは、従来から多くの人によって指摘されていることである。

さて『天演論』の最後の篇を、ここで敢えて「進化」と命名したことは、演化・演変の訳語が、目的も方向性ももたない、変化や分岐の運動であった筈のが、実は最高の状態への目的をもつ、定向的進化である本性を曝け出したことになる。だとすると日本人の訳語「進化」を拒否した理由は消滅する。日本の場合、文明開化の度合の前進の意味が含まれ、当初より定向的進化、即ち進歩であったからである。勿論、ハクスリーの書を訳そうと志したときは、「天演」の立場であったのだろう。しかし訳出のプロセスが進んで行く中で、一定の方向性・目的をもつ「進化」へと進化して行くことになったのであろう。そして皮肉なことに、日本人の訳語と大差ない地点へと辿り着くことになった（厳復には『天演進化論』一九一三年もある）。

さて本題に戻ると、一八九八年六月、やっと慎始基斎本が公刊の運びとなった。その後、同年に厳復自身が石印本で出版したのが、嗜奇精舎本である。以後、富文書局本（一九〇一年　木刻本、石印本）、張元済の普通学書室本（一九〇二年　排印本）などのテキストが次々に出版され、先述のように、王栻の調査によると三十種以上にのぼるという。

ところでこれらの刊行には、どのくらいの費用がかかり、売れ行きはどうだったのか。当時の印刷事情（木版、石印、排印の経費、割合、紙の種類と値段等々）はどうであったのか。当時の印刷事情については、傅蘭雅（フライアー）『江南製造総局繙訳西書事略（一八八〇年）、羅振玉『訳書条議』（一九〇二年）、賀聖鼐『三十五年来中国之印刷術』（一九三〇年頃か。張静廬『中国近代出版史料　初編）などが参考になろう。

『天演論』の場合、鄭孝胥と魯迅の記録が一つの手がかりになる。『鄭孝胥日記』によると、一八九九年一月四日、上海で『天演論』を一冊、張之洞に献ずるために購入した。これは、邱玉府の息子が資金を募って石印で刊行したもので、千冊で二百元かかったとのことだが、「購う者なし」と述べたという。鄭は一月十七日に、広学会に立ち寄り、自分用のを一冊買い求め、翌日には読了している。張之洞への土産用と自分用とが、果たして同一の版本なのか否か、値段はいくらであったか、なにも記していない。

魯迅は一九〇〇年頃、南京の礦務鉄路学堂在学中、「白紙石印の一冊の厚ぼったい本で、値段はジャスト五百文であった」と記している（『朝花夕拾』所収の「瑣記」）。邱玉府の息子の本の原価が一冊当り二

角であったのに対し、魯迅の買ったのは一冊五角に当る。紙質のよしあしなどに関わるのかもしれず、果たして適切な価格であったか否かはわからない。

当時の中国では、著作権、版権といった、知的所有権保護の発想は皆無であり、儲かりそうだとなると、営利のためなら次々と出版されることになる。日本の場合でも、福沢諭吉の『西洋事情』が海賊版が圧倒的優勢を誇った例もある。出版事業は、一面で文化普及事業であると同時に、他面で営利事業でもある。たとえば先述の陝西味経售書処の刊本などは、採算はさほど細かく追及せず、むしろ文化普及事業としての側面を主軸にしたものと言えよう。厳復がこれに対して何らかの発言をしたという記録が一切ないのは、自分の完全に納得の行った訳稿ではないとはいえ、自分の訳業の価値を認め、資金を拠出して世に送り出してくれたことに、むしろ奇特な人士として感謝の念があったのかもしれない。

厳復の場合、英国留学中から、自分の研究の成果や意見、また訳業などを文章にまとめ、駐英公使郭崇焘やその後任の曾紀沢に提示している。しかしその文章に難点があることも大きく作用して、概して評価は高くない（『郭崇焘日記』一八七八年十二月二日では、一般的に受け入れられている音訳の表記を自己流に変えて示すところから来る不審の念と、訳文の文字のごちゃごちゃした冗さ（煩瑣）の指摘がある。『曾紀沢日記』一八七九年四月四日には、『饒頓（ニュートン）論』など三篇について、「中華の文字（ぶんしょう）において、未だ甚しくは通順ならず」と記されている）。そしてそれらの文章はその後どうなったのか、所在は杳としてわからない。

文章が認められぬという不満は、科挙の正途出身者ではない故に自分の発言が重視されぬという憤懣と相俟って、長年心中に鬱積していた。ために一八九三年の四回目の落第まで、郷試に挑戦することになった。従って自分の訳物に好意的で、出版してくれることは、まず嬉しくありがたいことであったろう。

だが『天演論』の通行本の刊行が、彼のそれまでの臆病な心を一掃する契機になった。そして張元済の、厳復がかって李鴻章の命により訳出した、アレクサンダー・ミチーの『支那教案論』の出版の申し出を快諾した。厳復は手許の訳稿は誰が借りて行ったのか覚えてないが、王式通（書衡）が鈔本を作っているので、それを付印すればよいとし、この本の性格にふれている。それは、「一人の一時の見解」を述べたもので、「正経（まとも）な西学」とは比べものにならない。よって流伝に便宜でありさえすればよく、「小書」に仕立てるべきだの意見である（『張元済に与うるの書』一　一八九九年三月末～四月初）。かくして厳復の友人ミックの書は、張元済が当時院長職にあった上海南洋公学訳書院から出版された（尚、ミチーの人となりについては、『張元済に与うるの書』九　一九〇一年六月十一日参照）。

更に張元済は、翻訳機関の設置、字書の編纂等々の問題について、厳復の意見を叩き、またアダム・スミスの『原富』翻訳の進捗状況、分量、価値などについても尋ねている。そして、厳復の自宅の火災による原稿の焼失や義和団事件による南方への避難などによる、訳筆の遅滞を励まし、原稿を二千元で買い取る提案を承諾させた。かくして五か年の歳月を費やした、数十万言（約五十五万言とのこと）の『原富』がやっと完成し、一九〇二年、南洋公学訳書院から出版の運びとなった。出版に際して厳復は、前渡し金二千元の他に、訳者の苦労に酬いるために、印税要求の折衝も行なっている。ともあれ今回も呉汝綸の序文で巻頭を飾り、巻末に原語と訳語との対照表を付して、世に送り出されることになった。

一九〇三年、張元済は商務印書館に移り、出版人としての人生行路を定めた。そして以後、厳復の訳書は商務印書館との版権契約下に刊

行されることになり、『天演論』も巻末に「中西名表」が付されることになった（張樹年主編『張元済年譜』一九九一年　商務印書館）。厳復の以後の訳書も、商務印書館が版権を独占し、同様の体裁のもとで出版されることになり、『天演論』も含めて、商務印書館本が定本の地位を得て、ロングセラーとなった。そしてその版権契約による印税と出資股份の配当金とが、病身で子沢山の、晩年の厳復の経済生活を支える幸せをもたらすことになった（『長子厳璩に与うるの書』五　一九一九年六月二十五日）。

3、第三種類のテキストについて

さて第三種目のテキストとは、厳復から礼を尽して訳稿の修正を依頼された呉汝綸が、自らの日記の中に写し取った副本のことである。桐城派の文人で、文章の名家の誉れの高かった呉汝綸は、以前、曽国藩や李鴻章の幕僚をつとめ、上奏文の起草などに携わっていた。その後、直隷（河北省）の知県などを歴任して、当時は保定の蓮池書院の院長の職にあった。一八八〇年以来、李鴻章の創設した北洋水師学堂の総教習、九〇年に総弁に昇進した厳復とは、当然、多年の交際があったものと思われる。

夙に尊敬していた呉汝綸に、訳稿の意図と今後の訳書計画を伝え、訳文の修正方依頼の書簡に対して、呉汝綸から激励と快諾の返事（一八九六年八月二十六日）が来た。訳稿がもたらされるや、すぐに眼を通して大意を把握した呉汝綸は、娘壻に訳稿とともに書簡を厳復に届けさせた。その書簡の中で、「手づから副本を録し、これを枕中に秘す」ことを告げている（一八九七年三月九日）。従ってこれは、呉汝綸の私的なノートであり、ハクスリーの「名理」と厳復の「高文雄筆」とが相俟った「海内の奇作」として、「愛して釈つるに忍びず」のゆえに、「これを珍蔵し」て「軽るがるしくは人に示さず」を約束するものであった（日記中の副本の末尾に息子呉闓生が付した、呉汝綸の厳復宛の書簡と呂秋樵宛の書簡）。

とはいえ副本の末尾で呉闓生が指摘するように、副本は、「これを原本に比べれば、刪節、半ばを過ぎ、亦た頗る更定あり。僅に副を録するのみに非ず」であった。呉汝綸の私的な読書ノートのこの副本は、厳復の示した原稿をほぼ七分の一程度に切り縮めたものであり、簡潔で読み易いものになっている。

呉汝綸は厳復の文章を絶讃する。しかしこれ程までに大鉈を振っているということは、冗長で理解しにくいことを暗に認めたことになる。それゆえ実のところは、ハクスリーの豊かな学殖に裏づけられた明快な論理の展開に感動し、その内容をより明確に浮き彫りにするために厳復の文章から贅肉を削ぎ落して、「老懶」のため減多にしないのに、自ら細字で「甄録」したと見てよい。だとしたら、これは厳復の原稿に依拠しつつ、大幅に刈り込んでリライトした、いわば改作と称することができよう。息子の呉闓生の言いたいところはそこにあり、副本の次元を超えた、別種の創作物と見做すべきだと考えていたようである。

呉汝綸は、吏部尚書張百熙による、京師大学堂総教習就任の懇請を黙し難く、そのための準備を名目に、一九〇二年六月から五か月間近く日本に教育事情視察に出かけた。その間の過労が祟って、一九〇三年二月、安徽桐城の自宅で急逝した。父の死の報に接して、早稲田大学清国留学生部に留学していた息子は大急ぎで帰国し、葬儀を執り行なうとともに、父の遺著・遺文の整理に当った。それが、『桐城呉先生全書』（三六巻。一九〇四～五年出版）と、『桐城呉先生日記』（十六巻。死後すぐに門人達の協力の下に編集は終っていたが、出版は遅れて一九二八年）である。

そして『天演論』の副本は、『桐城呉先生日記』中に収録されていた。従って本来なら出版までは見ることはできない筈である。これを別個

に独立させて、『節本天演論』の名の下に刊行したのは、この本に独自の価値を認める息子の意向によるものである。『清史本伝』（清史館協修門人李景濂謹譔。『全書』に収録）によると、この本は「著わす所の書」の部に入れられており、呉汝綸の創作物と見做されている。

そして父の呉汝綸の訪日教育視察報告を『東遊叢録』にまとめ、父の中国帰着と同時に東京の三省堂から出版するという離れ業を演出したのは、この息子の才覚であった。文才に恵まれると同時に、出版の実務に通暁していた一人息子の呉闓生が、通行本『天演論』の流行とその難解さとを見て、この副本の公刊を考えつくのは、極く自然な成り行きであった。かくして『桐城呉先生日記』の巻九「西学下」に収められていた『節本天演論』は、「北京初印本、上海続印本」（『全書』の「桐城呉先生年譜」巻四「著述表」）として世に送り出された。

それが一九〇五年、上海澄衷学堂在学中の胡適の国文の教師楊天驥（字千里）が胡適のクラスに買わせて教科書に用いたものであった（『四十自述』）。『節本天演論』は総字数二万ばかりの、通行本の三割程度のコンパクトなもので、教科書として当然、分量の面からも、価格の面からも、手頃なものであったにちがいない。またつけ加えれば、この息子の学習用に編んだ『古文読本』（初印は東京三省堂。保定で続印）が、一九〇六年、中国公学に転校した胡適の眼に止まり、これが彼の進路を、自然科学から文学へと変更させた大きなきっかけになったとのことである。

ともあれ通行本『天演論』の読み難さに比べて、平易で明快、且つ簡潔で流麗な『節本天演論』は、二十世紀の初頭、各地に続々と設立された中学の教科書に用いられ、ついには「中学生の読みもの」（『四十自述』）として流布した。以下その例を挙げる前に一言断っておきたいことがある。呉汝綸は、厳復の文章を添削して、「更定」して別の言葉で改めたのか、との問題である。筆者の調査の限りではそうしたことがないとは言えない。ある一段をばっさり削ったり、文章の途中で二、三行後の文章につなげたり、危うい綱渡りのような形で、文意を損うことなく、無駄を省いて、読んでいて文章の流れに無理がない形で仕上げている。と同時に、文章の小気味よいリズムの重視と、表現の稚拙さとのあまり、相当に「更定」した箇処も多い。

その技倆の冴えは並々ではない。他人の文章を刈り込んで、作者の言わんとする内容を過不足なく伝達するのは、流石に文章の達人と言われる人の芸当である。恰も、青色を基調としながら随所に他のさまざまな色が混在して見苦しいパレットから、くすみや濁りも除いて鮮やかな青色の部分だけを別の小さなパレットに示してくれた感がある。

さて当時の青少年たちに、『節本天演論』がいかに愛読されたかの例を挙げよう。ザ・ノースチャイナ・ヘラルドの一九〇六年三月十六日付の「日本の中国人留学生」は、これと同じ表題で最近発表されたある外国人観察者のレポートを紹介している。それによると、"A very popular book there is Huxley's *Evolution and Ethics*" とのことである。大多数が東京にいる中国人留学生が、『節本天演論』、通行本『天演論』、そして原本（日本語による翻訳が出るのは昭和二十年代以降である）などを抱えこみ、議論に夢中になっているさまが眼に浮ぶようである。但しこの場合の争点は、宗教が必要か否か、不可知論について、などであったという。

周恩来は、南開中学在学中、この本を読んで作文の課題、「老子は退譲を主とし、赫胥黎（ハクスリー）は競争を主とす。二説孰（いず）れが是なるや、試みにこれを言え」の解答文を書いている。これは模範的解答文であったと見え、南開中学の「校風」第二二期（一九一六年三月二十日）に掲載された（後に『老聃赫胥黎二氏学説同異弁』と題名を改めて、南開中学の「競業学報」第五期に同年十月発表している）。

李大釗の場合、一九〇五年に永平府中学に入学し、〇七年に北洋法

政専門学堂に転じて、卒業後、一九一四年年頭に、日本に留学した。一九一六年、在学中の早稲田大学政治経済学科本科での学業を中断して、「中華再造」の闘いに馳せ参ずることになった。その時に執筆した『青春』（「新青年」二巻一号　一六年九月）は、文学的香りに包まれた情熱的な文章で、五四時期の青年に愛好され、陳毅などは暗誦していたと言われる。この『青春』の一節に、先に述べた、ウィリアム・トムソンとテイトの共同研究の学説が引かれている。この部分は先述のように、通行本の「自序」からは削除された。そして『青春』のこの一節は、呉汝綸の修正の跡が指摘できる箇処である。よって李大釗が『節本天演論』を読んでいたことがわかる。

ところで李大釗や胡適よりほんの少し若く、周恩来より年長の毛沢東の場合はどうか。一九一二年湖南省立第一中学に入学した毛沢東は、国文の教師から『御批通鑑輯覧』を借りて読んだりした後、中退して湖南師範学校入学までの半年間、省立図書館で独学に励んだ。エドガー・スノーの『中国の赤い星』によると、その間、厳復の訳書をはじめ多くの書籍を貪り読んでいるが、その中には『天演論』の名は見当らない。李鋭は『毛沢東的早期革命活動』の中で、その時期に『天演論』を読み、大きな思想的影響を受けたと言っている。

毛沢東は『蕭子昇に致すの書』（一九一五年九月六日）の中で、黎錦熙から『群学肄言』（厳復の訳したスペンサーの『社会学研究』）の「繕性篇」の一読を勧められ、「繕性篇」に感動して全巻を読み、「学問をする道はここに在った」と感嘆してやまない。この当時、毛沢東は歴史の教員の黎錦熙に急速に接近して教えを仰いでいる。そして黎からその読書法、即ち「演繹法」と「中心統轄法」とを聞き、「吾れこれを聞き甚だ警むるあり」と、はっと自覚するところがあったと、蕭子昇に告げている。その「演繹法」とは、「その曲を察して以てその全を知るものなり。その微を執りて以てその通を会する者なり」と説明している。

この「演繹法」の説明の文章は、実は通行本『天演論』の「自序」中で、「内籀」（帰納法のこと）についての厳復の文章である。黎錦熙がそのように説明したとすると、黎自身が誤読したことになる。そしてそれに気がつかなかったとしたら、毛沢東が『天演論』を精読して大きな思想的影響を受けたとするのは、李鋭の勇み足だろう。毛沢東がスノーに延安で語った時、他の書籍の名はかなり詳しくあげても、『天演論』の名が告げられていないのは、その印象が稀薄であったことを物語るものではないか。

従って毛沢東のような場合は特例として、一九〇五年頃から一九一〇年代の末頃までの間に中学に在学した世代、それは、一八九〇年前後から一九〇〇年代に生まれた世代であるが、その世代の大部分が学校で『節本天演論』に接したと結論するのは速断にすぎるであろうか。勿論、これで『天演論』は卒業したつもりになる者もいれば、そこから通行本へと進む者もあったろう。

そしてこうした『節本天演論』の中学の教科書としての採用は、ひとえに厳復の通行本が難解であることに起因する。この点については、『原富』の新刊紹介で、梁啓超が厳復のために惜しみつつ、敢えて苦言を呈したところである（「新民叢報」一号　一九〇二年二月）。それに対し厳復は敬意を表しながらも、ことさらに古めかしさを追求すると評されるのは心外である、問題は文章の難・易にあるのではなく、正確さの追求にあるのだなどと反論を寄せている（「新民叢報」七号　〇二年五月）。

しかし有り体に言えば、厳復が読ませたいのは中国の古書を沢山読んでいる知識人であり、「学僮」に読ませて彼らに益を受けさせるつもりではなかった。読んでも理解できないとしたら、それは読者の責任で、訳者の責任ではない（同上）。厳復の翻訳の基本姿勢が、こうしたお高

くとまった名人気質であればこそ、「学僮」に近づき易くさせる、呉汝綸の『節本天演論』が需められる理由がある。

自分の訳文の難解さについての苦情を多く耳にした厳復は、一方で高踏的で偏屈な姿勢は堅持しつつも、他方ではそれなりに判り易くするための努力を払い、次第に改善の度が進んだ。従って最も難しいのは、最初の訳物である『天演論』との指摘（周作人『魯迅与清末文壇』一九五七年）は正しいだろう。

そして光緒二八年の『京師大学堂編書処章程』の頒布により、自分の版権が脅やかされることを危惧して、管学大臣張百熙に版権保護を訴えた（『張百熙に与うるの書』二　一九〇二年又は三年）厳復は、『節本天演論』の出版について抗議した形跡はない。文章の師と仰いだ呉汝綸への遠慮があったのか、『節本天演論』がよく売れようと否と、『天演論』の売れ行きに関係がなく、むしろ『天演論』に人々の接近を促すと見たのか、一切わからない。ただ出版は知っている筈だが、何事も語っていない。

あるいは両書は相異なった本だと考えていた可能性も否定しきれない。従って両訳書の翻訳意図を中心に確認の作業をしてみたい。

4、通行本と『節本天演論』の相違について

先に、呉汝綸の息子が、「これを原本に比べれば、刪節、半ばを過ぎ、亦た頗る更定あり」として、『節本天演論』を父親による改作と見做したことを述べた。息子によると、これは剽窃や模倣ではなく、別種の創作物であり、その確信が出版に踏み切らせたと言ってよい。ところで息子が父の日記の中の副本と比べた「原本」とはどのテキストか。呉汝綸は、大切な原稿が道中で遺失するようなことがあってはと心配し、わざわざ娘壻を返却に派遣している。そして既に述べたように、この原稿を呉汝綸の忠告に従って修正して、『手稿本』が作り上げられたのである。

だとすると、息子の呉闓生が比べてみた「原本」とは、書肆に並べられている通行本ということになろう。そして大きく節縮されているとはいえ、それだけにとどまらぬ、両者の顕著な違いに気づいたればこそ、「亦た頗る更定あり。僅に副を録するのみに非ず」との判断を下したと見てよい。さてそれではその決定的な相異点はどこにあったか。それは先ず、双方の厳復の「自序」にあった。

『節本天演論』ではこの訳本の原著者ハクスリーの著述の目的は、スペンサーの「天に任じて治を為すの失を救う」ためだと述べ、そしてそれゆえに、「自強して種類を保つの道において、反復意を致し」ていると指摘する。それに対し通行本では、ハクスリーのこの著述の趣旨は、スペンサーの「天に任じて治を為すの末流を救う」ことにあり、その著書の中で論じている所は、中国の古人と非常によく合致するものがあり、「且つ自強保種の事において、反復三たび意を致し」していると述べる。

この二つの厳復の序文は、ハクスリーの著述の狙い（即ち、ハスクリーとスペンサーの立場の違い）、ハクスリーのこの原著の評価に対する文章の流れ、において明らかに色調を異にする。『節本天演論』ではスペンサーの「任天為治」、自由放任主義に欠陥があると、ハクスリーが明確に認識していたとの立場に立つ。それに対してハクスリーは、「自強して種類を保つ」、積極的な方策を懇切丁寧に伝えているとする。従ってこの文章は順調に流れて淀むところはない。要するに、ハクスリーはスペンサーの「任天為治」の社会ダーウィニズムに傾く弊害を是正して、人為的努力により民族を滅亡させぬ方策を力説していると取るのである。そしてこうしたハクスリーの著述の意図の解釈は、つまり厳復の読み取ったものであり、正しく厳復がこの著述を選んだ狙いを端的に告げるものと見てよい。

ところが通行本では違ってくる。ハクスリーはスペンサーの「任天

為治の末流」を是正するために著述したことになる。だとすると、悪いのはスペンサーではない。スペンサーの説を歪曲して悪用し、帝国主義の他民族侵略・植民地化を正当化する理論に仕立て上げた、その「末流」に問題があるのである。ハクスリーは何もスペンサー個人に反対ではなかった。かくしてスペンサーの冤罪は晴らされ、二人の対立関係は解消する。二人の共通の敵、それはスペンサーの学説を拡大解釈して、その権威によりかかって帝国主義の御用理論を説く「末流」、亜流たちであった。

そしてスペンサーの評価の変化につれて、ハクスリーの位置が不安定になってくる。それが先ほど引用した通行本「自序」の、ハクスリーのこの著述を選んだ理由の微妙な変化に現われている。そこでは、ハクスリーの著書の主張が、中国の古人のそれと非常によく合致している（ハクスリーの著述の眼目を「勝天為治」と概括して、唐の劉禹錫の『天論』上の「天と人と交（こもも）も勝つ」に比擬する）ことが、まず第一の理由にあげられる。そして「自強保種」云々は、「且つ」として、付け足りの位置に後退させられる。

このことは、厳復の当初の予想とはちがい、通行本の中で占めるハクスリーの評価、位置づけに重大な変化が生じてきたことを物語るものと言えよう。ハクスリーの評価の低下に逆比例してスペンサーが浮上してきた。そしてハクスリーの著書の翻訳のつもりが、途中からスペンサーなどの説に依拠しつつ、ハクスリーに反駁したり、批判を加えたりの奇妙な逆転現象が現われてくる。そしてこれが、読者の頭脳を徒らに混乱させ、独特の難解さを生んでくる。実は厳復の『天演論』の読解の困難さは、文体や訳語の問題も無視できないにしても、なお内容の問題の方にあった。なぜこうした迂回路を取るのか、いっそハクスリーの訳出を中断して、スペンサーの著書を直接翻訳した方がよかったのではないかとは、当然、誰しも考えつくことである。そして本人もそれに思い当ったと見え、翻訳作業中の『原富』の次に、スペンサーの『群学肄言』の訳出に取りかかることになる。

ところで厳復が、「光緒七、八の交」（一八八一～八二年）に既にスペンサーのこの本を読んでいたなど言うのは（『群学肄言』の「訳余贅語」）、些か見栄に属することと思われる。勿論、見栄を張りたい理由がないわけではあるまい。それは、自分以前にとっくにスペンサーに注目し、その極く一部であれ訳出して刊行した中国人がいることに、我慢できなかったためだと見てよい。厳復が『原強』（一八九五年三月）、及び『原強修訂稿』の中で、スペンサーの雑著の中で最も著名なものとして、『勧学篇』（のちの『群学肄言』）と並んであげたのが、『明民要論』（『原強修訂稿』では『明民論』）である。そして『明民要論』、即ち『教育論』の価値を逸早く見抜いてその一部を訳出した中国人がいたことを認めたくなかったのだろう。勿論、スペンサーのこの書を手にとり、中味を拾い読みをしたことは、「二十年以往」（「訳群学肄言序」）にあったのかもしれない。しかし本格的に取り組み始めたのは、むしろ一八九四年の日清開戦をきっかけとしてであると思われる（『長子厳璩に与うるの書』一　一八九四年十一月八日）。

子供っぽいと言えばそれまでだが、『手稿本』と通行本の「自序」の日付を一八九六年十月十六日（丙申重九）とするなどの操作から見て、むしろ厳復の内面の傷痕に思いを致すべきであろう。英国留学から勇躍帰国しても、重用はされず、ただ技術官僚として重宝に使われるだけであれば、その人一倍強い自己顕示欲、プライド（『郭崇燾日記』一八七八年七月十六日、曽紀沢日記』一八七九年四月四日など参照）が、いかに屈辱感に噴まれたかが理解できよう。名誉挽回と立身のチャンスを求めての郷試受験も、四回とも不合格であった。だとしたら西洋の「学問を治めて二十余年」、の語学能力の高さを誇る以外にはなかったろう（『梁啓超に与うるの書』一　一八九六年十月）。

ところで、ハクスリーの著書の訳出を始めた当初、スペンサーはどのように位置づけられていたか。厳復の訳稿の修正の依頼の書簡を受け取った呉汝綸は、厳復がスペンサーは「天演に順えば、郅治終に成る」と述べているとし、同時にハクスリーは「治功を講ぜざれば、人道は立たず」と述べており、この二人の説の内、ハクスリーが「自強の治を資け益すること、誠に深く誠に邃し」と言ったことを紹介している（一八九六年八月二六日）。

そして訳稿が届いて、その返却の際の書簡で（一八九七年三月九日）、呉汝綸は副本を録したことの報告の外に、厳復のこの書の訳出の意図についての感想を述べている。それは厳復が、「蓋し吾が土の競わざるを傷み、炎黄数千年の種族が、将に遂に以て自存するなからんとするを惧れて、惕惕焉としてこれを進むるに人治を以てせんと欲す」の意志から訳したとする解釈である。

そしてこの時に記録した『節本天演論』の厳復の「自序」に、ハクスリーの著述の目的が、スペンサーの「任天為治の失」を正すためであると述べられていた。だがその「自序」の中にはまた、スペンサーに対する高い評価をした文章が二箇処ある。スペンサーが「天演」説で著名であり、「天演」についての界説をしていること、また「物変循環の理」を発見したことなどである。だとすると、厳復は一方で、「任天為治の失」をもつスペンサーには賛成できなかったにせよ、「天演」の理にくわしい科学者、哲学者としてのスペンサーは高く評価していることになる。先にも述べたように、一八九五年三月発表の『原強』の中で、スペンサーの「群学」が西洋近代自然科学に根底をもつ新しい学問であるとして絶讃していたのである。

従って一方的にスペンサーを悪者と考えていたわけでもなさそうである。むしろスペンサーの評価が揺れ動き、統一したイメージを結ぶことができなかった段階にあったと結論できる。そして当面は、自然の成り行きに委ねよと説いているかぎり、列強の蚕食下にある中国を見捨てて、帝国主義を是認する危険な方向に道を開く理論と受けとめたようである。その意味で、厳復本人に関する限り、彼自身のスペンサー理解がまだ不十分であったということになろう。

だが呉汝綸の助言に沿って訳稿を手直しして『手稿本』を作成するプロセスで、あらためてスペンサーや、その他に関連する人々（マルサス、バジョットなど）の著述に眼を通す中で、スペンサーに対してもっていた偏見が一掃され、評価の変化が生じて来た。それは『手稿本』の「卮言」十五の後に、「この下に宜しく後案を附し、斯賓塞の『治が進めば自ら過庶を患えず』の旨を著すべし」の箇処に明らかに看て取ることができる。

ついに分裂していたスペンサーのイメージが統一的に把握できる段階が到来したわけである。そして更に何度も訳稿を見直して錬り上げる中で、ついにスペンサーに何かのわだかまりもなく傾倒するまでに変化を遂げた。とはいえ翻訳の対象はハクスリーである。もはや放棄したり引き返したりできないところに至っていた厳復は、原著者のハクスリーの説に不満を述べたり、反駁を浴びせたりして、スペンサーの説を顕彰するという、変則的な翻訳書を作り上げることになった。

訳業の進むにつれて厳復の立場が変化して行ったということは、最初の頃の訳稿と、最終的に完成した通行本のテキストとの間には大きな隔たりがあることになる。だが呉汝綸には終始一貫、変化はない。その『天演論』理解は、初めて読んで『節本天演論』を写し取った時から、通行本の呉汝綸の序文まで、これがハクスリーの訳書であると見ている。そしてハクスリーが、「任天為治」の立場に対し、「人を以て天を持し」、「天と勝を争う」の見解をもつと理解する。そして、「人の天と争いて天に勝つは、またみな天事の苞むところ、是れゆえに天行と人治とは、ともに天演に帰す」と、むしろハクスリーから遠く離

れて、人為的努力のもつ成果に格段に楽観的であるとも見られる。そしてそこから、呉汝綸は、この書の読者が自己の置かれた情況にめざめ、自強に励むことを期待する。

さて以上の通行本と『節本天演論』との、翻訳の意図についての検討から、この二つのテキストは、結局、大きく異なった本に変貌を遂げていると結論せざるをえない。従って全く別物と呉闓生が見たのに、道理がないわけではない。勿論、厳復としては、一冊の訳書としての破綻を免れようとして、「論」十七「進化」で、訳すべきものをわざと訳さないなどのやり方をとり、ひとまずまとまりをつけてはいる。なんとか、これでスペンサーとハクスリーとを和解させ、両者の立場に齟齬はないとして一致点を強調して終了させたのである。しかしやはり一貫していないとの謗りは甘受せねばならぬところがある。

ところで厳復は一貫して「任天為治の末流」を懸念していたのであり、それを「失」としたのは呉汝綸の訂正によるのではないかとの反論があるかもしれない。その可能性を百パーセント否定できる自信はない。それは『原強』でのスペンサー評価の高さを無視できないからである。だがよしんば呉汝綸の勇み足であったにせよ、それまでの厳復との往復書簡や原稿を読んだ上での彼の判断である以上、筆者としては以上述べてきた論旨を大きく変える必要は認めない。

5、終りに

前田愛は『近代読者の成立』（岩波現代文庫）の中で、「大衆の漠然とした感情に合理的な形を与え、そのエネルギーに一つの方向を与える書物がある」との、ハクスリーの孫のオルダス・ハクスリーの発言を引きつつ、そうした書物がベストセラーになるが、「しかし、厳密にいえば、その方向は著者が意図した方向とは必ずしも一致しないであろう。むしろベストセラーは大衆の誤解によってつくりだされるものである」と喝破する。『天演論』の場合、三種類のどのテキストも、やはり諸外国の圧倒的に優越した軍事力に蹂躙され、教会・宣教師の増加、商業・工業面での外国勢力の進出を眼の当りにする中で、自国の運命を憂え、民族の滅亡の危機に脅える人々に、自らの置かれた世界情勢の動因についての認識を与え、何をなすべきかの出路を指し示す書として、殆どの場合、読まれたのである。

換言すれば、ハクスリーの見解を伝える書として、いわば呉汝綸の受けとめた方向において読まれたのである。従って通行本の『天演論』にこめた厳復の意図は、十分には伝わることがなかったと言っても過言ではない。「思想的著作の影響の問題は、この著作者の文脈と読者の文脈とのズレ、ないしはその相互作用の力学を測定することによって、始めてトータルに把えられるはずである」と前田愛は言う。『天演論』の場合、さまざまな訳稿の段階で読者はそれぞれの文脈において受けとめ、訳者はまたそれぞれの段階で文脈を変動させて行っている。従ってこの影響、受け止め方のトータルな把握は、とりわけ困難を極める。よって読まれた方について個別に考察する必要がある。本稿の蔡元培の受けとめ方は、ある意味で通行本の訳者の文脈をよく解するものと筆者は目下のところ考えている。（注(1)は二〇〇二年十月十二日、日本中国学会第54回大会において、「『天演論』の周辺――読みの難しさについて」の講演原稿の内、三分の二程度を加筆補訂して発表するものである）

(2)　孫宝瑄『忘山廬日記』には、厳復が梁啓超に送った『治功天演論』と通行本との二種のテキストについて、読み進めつつの疑問点や発明するところについてのノートが多く残されていて、当時の人々の新知識についての貪欲な関心がよくわかる。